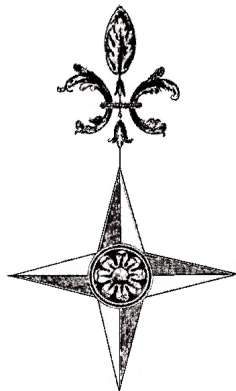

あとがき

『東西南北2007』をお届けします。本号は、3つのシンポジウムの報告と講演会報告1つ、そして各研究プロジェクトの成果をまとめた各種論稿14本という構成になりました。

「競争的環境下の大学」という社会状況のなかにおいて、和光大学においても「改革」や入試などへの取り組みが日常業務化し、教育の現場で必要とされる努力と時間も一層増大してきているのが実感されます。そうした状況下で原稿をまとめてくださった方々には、心からお礼申し上げます。

それぞれ「ネットワーク」「ジェンダー」「若者」をテーマとした3つのシンポジウムは、いずれも今日私たちが、研究者としても、ひとりの人間としても、正面から見据えるべき課題への取り組みといえるでしょう。シンポジウムでの諸報告と討論が、問題をさらに掘り下げる契機となることを願っております。また、ボスニア・ヘルツェゴビナの現在を取り上げた講演会報告は、日頃私たちの視野に入って来にくい地からの言葉であり、従来から『東西南北』が担ってきた特徴を継ぐものです。さらに、研究プロジェクトの報告は、7つの研究グループの中間的な成果です。内容もとりまとめ形態もさまざまであり、多様とも混淆ともいえますが、これら研究プロジェクトの成果公表に、より適切な表現方式・公表形態を生み出していくのは、研究所の今後の課題でもあります。

ところで、『東西南北』は、2005年から判型が変わりましたが、性格においてもこの間変化を続けていま



す。発刊当初、たぶんには和光大学の知的広報誌的な性格をもっていました。近年は、研究プロジェクトの成果公表媒体たる役割を強めています。今後は、その両面がより高度なレベルで融合しながら発展することが課題となるでしょう。

前者の、知的広報誌の性格は、学術シンポジウムや各種学術交流の取り組みを通じて、真摯に、時には尖鋭に、問題の探求を積み重ねるならば継承し得るものと思われれます。また、プロジェクト研究に限定せず、学内の意欲的な研究に積極的な光を当てていくことなども考えられるかも知れません。

後者の方向については、緒についたところといえます。各学部紀要と並んで、研究所の紀要が独自の光を放つための基盤は、多様で活発な共同研究の存在に求められるでしょう。

和光大学の共同研究の流れは、同一研究領域の研究者が限られるなかで、学際的な研究の創出を通じて、研究の活性化を追求したものと伝え聞きますが、小規模な大学で多様な共同研究がなされているのは貴重なものです。ただ、現実の共同研究活動をみますと、必ずしも活発とはいえない状況にあり、共同研究の気運が希薄化しているのも事実です。したがって、今後、個人研究の実情に即した研究支援なども考慮すべき課題となるかと思われれます。しかし、依然、個性的で質の高い共同研究の創出は、大学の個性化に対応して一層必要とされているものといえます。研究所のあり方としても、総合文化研究所の「総合」が「無個性」にならないためには、共同研究を通じて、研究所内に、二三の特定研究の場を創り出すことなども試行されてもよいのではないかと考えています。

いずれにせよ、『東西南北』が、和光大学の各種研究の活発な展開に資する存在になれることを期しております。

和光大学総合文化研究所所長 山村睦夫